

☒ 話すこと ☐ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AIの活用による個別最適な学びの充実及び言語活動とAIとのベストミックスとなる指導の充実

実証概要

<校数> 3校(中学校:2校 義務教育学校:1校) <人数> 712名(中学校:673名、義務教育学校:39名)
<学年> 中学校:第1、2、3学年 義務教育学校:第8学年、9学年 <アプリ等> ELSA for Schools(ELSA Japan)
<AI機能について> ●発音分析機能 ●対話機能 ●スピーチアナライザー機能 ●学習進捗管理機能

【主なAIの活用方法】

○対話練習、音読練習

【活用場面】

○授業中の帯活動、家庭学習

【使用頻度】

○毎時間継続し、5分以内

【検証方法】

○英語力→GTEC 関心・意欲→アンケート

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AIを活用した「学び方」を指導

- ・生成AIとの対話練習で知った新たな表現等を記録に残し実際の言語活動で活用させる
- ・生徒に、AIから即時に表示される改善点をノートに記録し、それらを克服するため、練習を行わせる

●AIの評価やフィードバックを教師がサポート

- ・AIを活用した練習の後に、AIからの個別のフィードバックを確認させる
- ・一斉指導において、AIからのフィードバックを必要に応じて全体で共有し、学習改善につなげる

●AIの活用と言語活動を往還した指導の工夫

- ・生成AIとの対話練習の前後で生徒同士の対話を設定することで学びの変容を自覚させる
- ・音読では、一斉指導等で自己の課題をつかませた後、AIを用いた個別の音読練習を行う
- 実際のコミュニケーションを学習のゴールとして設定
 - ・ネイティブとのやり取りを体験し、コミュニケーションの楽しさや、達成感を味わうことで英語学習への意欲を高めるために、場面・目的・状況を仕組む
 - 例)複数のALTを招致し国際交流会等を実施

教師の役割

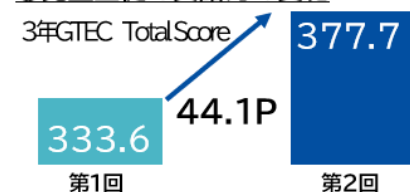
※教師がAIの評価やフィードバックの内容を整理・意味付けし、生徒の発言内容に着目させた上で、言語活動につなげる

教師の役割

※AIの活用を通して、教師には、学習目標とAI活用を結び付け、言語活動につなぐ授業デザインが、求められる

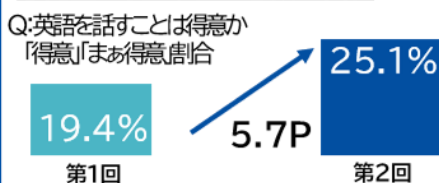
実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化



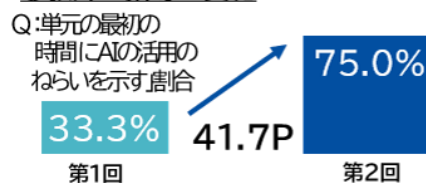
生成AIの活用と実際の言語活動の往還により、個々の習熟度に応じた練習が展開され、生徒の英語運用力が高まり、実践的な英語力の向上につながった。

②児童生徒の関心・意欲の変化



AIとの対話練習により、生徒の緊張が軽減され、心理的ハードルが低下した。即時フィードバックと個別最適な練習を通して達成感が得られ、学習意欲の向上につながった。

③教師の指導の変化



学習状況の可視化により評価の精度が高まり、指導改善が進んだ。さらに、AIを何のために活用するかを明確にした授業への転換が図られた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

【年間を通じてリーダー研修会3回・学校訪問4回】～理論と実践を往還する育成体制を構築～

- 第1回研修(オンライン) → 事業の趣旨とAI英語学習アプリの基本的活用を共有、AIと教師のベストミックスの考え方を確認
- 第2回研修(集合) → 先進事例の共有や実践交流を実施
- 第3回研修(オンライン) → 成果と課題を整理し、次年度につながる実践モデルを検証
- 学校訪問(4回) → 授業参観と協議を通して、AIを効果的に活用した個に応じた学習と教師の役割を意識した授業改善を支援
- 普及のための公開授業 → AIを効果的に活用し、生徒が主体的に英語を使う場面を重視した授業を提示

研修において先進地域の実践等の紹介とともに、好事例の収集・共有を行ったことで、リーダー間で具体的な授業改善が進み、AIを効果的に活用する授業力の向上が見られた。さらに、その成果が各校へ還元されることで校内での実践が広がり、指導の質の底上げにつながった。また、公開授業の実施により、AIを活用した英語教育の実践例を他自治体へ発信することができ、県内の広範な地域への普及促進につながった。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●成果

- 生徒の英語力向上
- 生徒の学習意欲の向上と家庭学習時間増加
- 単元や活動のねらいを生徒と共有することに対する教員の意識向上

▲課題

- 授業におけるAIを活用する時間と言語活動や他の学習活動のバランス(効果的な活用時間とタイミング)
- 家庭学習や長期休業での継続利用の個人差

◎今後に向けて

- 言語活動に応じたAI活用場面と時間配分を明確化し、再現可能な活用事例として各学校へ展開
- 本事業を広く共有し、授業・家庭学習を含めた活用モデルを普及
- AIアプリだけでなく、生成AI、デジタル教科書等を活用した指導の一層の推進